

大原幽学著『微味幽玄考』をめぐって

蛭田道春

はじめに

大原幽学（1797 - 1858）は、幕末の農民指導者、社会教育実践者として二宮尊徳と同じくあげられる人物である。幽学の教説は性理学と称し、農民等を対象に教化活動をおこなっている。例えば、婦人会（女会）・小児会（子ども会）の活動、先祖株組合の結成（農業協同組合）、変え子教育、生活改善、日用品の共同購入、耕地整理など多様な実践をおこなっている。しかし、彼の活動は当時の為政者に疑念を持たせ、数回にわたる取調べをうけている。そのため人生の最後は自殺（1858年）である。これまで幽学の研究は数多くなされてきた。しかし、彼の著作をめぐる経過や正本なのか訂正本なのかはっきりしない面がある。それは数回にわたる取調べや、また彼自身によるたびたび草稿に筆をくわえていることである。彼の代表的著作であり、また彼の思想的根拠でもある作品「微味幽玄考」は、11巻の構成であったらしいが、最終的には、4巻5冊と晩年の最後に書かれた「子育て編」を加えた合計5巻6冊である。つまり「微味幽玄考」は、当初4巻5冊であったが、自殺1カ月前（取り調べ後の1カ月の期間）に書かれた「子育て編」が加えられたことである。¹⁾そこに「微味幽玄考」の成立を検討する価値が存在する。

「微味幽玄考」について、大原幽学記念館が刊行した「大原幽学——幕末の農村指導者——」に次のように書かれている。

「性学の思想が書かれた『微味幽玄考』は幽学の主著である。ただし自筆のもので完全に残っているものはなく、すべて下書きのものである。また『微味幽玄考』の前身である『性学趣味』、その他の草稿で草稿の断簡も卷子に収められている。冊子で残っているものは、自筆ではなく門人が書きうつしたものである。」（国指定重要文化財「大原幽学関係資料」概略の中から）

このことから、「微味幽玄考」の正本がみあたらないようである。このたび、小生が関与した資料の中にそれに値する文書が存在したので、その文書の性格を吟味する。

その方法は、文書の時代性、幽学の筆跡の特徴、題箋の特徴、文書の内容などから考察する。研究の成果は、「微味幽玄考」の存在に光をあてることになる。

1. 幽学と門人（道友）とのかかわり

(1) 神文の誓紙

幽学は、「易術及び観相学の免許皆伝を請う者並びに性学入門を望む者」には神文の誓紙を入れて、門

人の加入・入門を認める手法をとっている。²⁾ その手法は、師弟の関係づくり・存続・維持のためであると考えられる。

大原幽学著『微味幽玄考』をめぐって

(2) 景物の贈与

幽学は、門人の善行者（勤勉、孝行、）に対して、扇子、鏡、櫛、かんざし、墨・筆、など種々の景物を贈っている。このことによって門人の行為を無上の名誉としてみとめることによって門人との関係を密接なものにしようとしている。

「誠の道の大いなるをよくも学ばれて。身の行のあしきを改め、常に初心迄も好める酒をも改めて、……扇子をまいらす。」（道の記 巻一）³⁾

「性質実直にして、常に能く母に仕へ、此者十三歳なれども、一の愛すべき者也。……或時母の教えありけるを能く聞きわけ守り、一日稲二百束をこく。其孝心母の教えに従ふ。……天晴の事に付、景物針箱を遣す。」（景物集）⁴⁾

(3) 多様な相談と具体的な生活相談

幽学の書簡や後の聞き書きの記録から、道友からいろいろな相談をうけたことへの教えや、また幽学自身からの訓戒から、常に道友との日常生活での課題解決の方法がみてとれるとともに、門人とのより密な関係がうかがえる。

(4) その他、著作を配布したり、書面をすぐに送付して指導をしている。このことによって門人との関わりを多く工夫している。

「林善兵衛殿家内の和を得たりとて、一冊を送らす。」（道の記巻一）⁵⁾

「改心せらるゝに付、宗左衛門子へ遣す書左の通り。」（性学日記）⁶⁾

「歸りて書状を遣す。」（道の記 巻一）⁷⁾

以上のことから、幽学と門人とのかわりは密接で、多様な面から指導・助言をしている。

二

2. 微味幽玄考の正本の行方

幽学は、1840年（天保11）から1846年（弘化3）の間に次の各資料「性学日記」からも著述に励んでいたことがわかる。そして何とか刊行しようとしていたことが伺える。

性学日記⁸⁾

「終日性学の書認む」「著述下書すこと終日」「著述の下書認む」「終日著述の下書を認むる。」

「終日書き物をして……性学談義」

「19日より『幽玄考』を綴らんとすれども、病にとらはれ、日々無量にて暮らしぬ。」⁹⁾

「予が『性学幽玄考』著述之儀も、知らるゝ如く半ば綴り候へば、命あらば十ヶ年之内には蒙御免可致出刻間、時之到を可被相待候。……」(書簡集)¹⁰⁾

しかし、門人への指導の多忙さ、奉行所の取調べなどのことから刊行できなかつたのである。¹¹⁾

鈴木映里子氏によれば、「現在の旧八石資料には自筆の『微味幽玄考』完成稿は存在しない。幽学自筆の書簡・草稿はある時期に貼りまぜて卷子仕立てにされて伝来されてきた。」¹²⁾と述べている。微味幽玄考については、大原幽学記念館にはそのほとんどが下書きであることから、そのとおりであろう。しかし、幽学自身にとって「微味幽玄考」がライフワークであるとしたら、何とか奉行所などに没収されないようにしたのではなかろうか？

微味幽玄考の正本があるとしたら、奉行所の取調べの時に没収されたときだれかに密かに渡しておいたとか、また幽学が自殺したときに形見分けのときに誰かが重要なものであるので保持したかである。さらに、明治期には、「門人袖を連ねて教会を去り……」、「寄宿舎を焼失して幽学の遺物を失うこと少なからず」、「教会の資産全く尽きたり」のことからも資料そのものが散逸する機会があったなかで¹³⁾、最も重要な「微味幽玄考」の正本が誰も知られない間に保持存続されていたのであろう。いずれにせよ、「微味幽玄考」の正本の資料がどこかに存在しているかがわからない状況であったのである。

ただ一つ考えられるのは、1845年(弘化2)11月の小諸道友宛の書簡に「又其節御約定の著述3巻め、漸く為書送り様間、約束之通穴さがし頼入候。」¹⁴⁾とあり、著作を送付している場合がある。また、天保7年の書簡に「此物事書は、祥藏殿一枚御遣し可給候。……尤彼五軸と此の二書は、道を得る迄毎日ふくして可然候。又大きく写して、替て読るべく候。……」(道友連宛)¹⁵⁾とあり、幽学が記した書を道友に送付している。これらのことから、幽学の直筆が門弟に送付されていることから、幽学の直筆が門弟にのこされていることが十分、推測されることである。

3. 微味幽玄考正本の検討

このたび、古書店から購入した5冊本を中心に吟味してみる。(写真1)

唐沢富太郎編著の「教育人物事典」に所収された大原幽学の解説には、「大原幽学の書」として、「大原幽学の書は簡素であると同時に筆勢がある。が同時に癖があり、ひねっている点で個性派の書であるといえよう。自己流で素直に入りきれない書といえる。しかし一面「孝」「徳」という字には独自の鋭いものが見受けられる。」と指摘している。

このことから、大原幽学の文字には他人が書けない特徴があると考えられるので、表紙、本文の文字、題箋などから考察してみる。

(1) 題箋

例えば、題箋であれば「微味幽玄考」のなかで、「微」「味」からあげてみる。

- ・幽学記念館本所蔵の卷子本と蛭田本の冊子の題箋（写真2、3）

写真からもわかるように、「味」、「考」、「幽」などの書き方がにている。

味の字が両方ともにハ偏になっている。考の部分が弓になっている。

両方とも青色の題箋で全く同じである。

- ・蛭田本中表紙の表題と卷子本の題箋（写真2、4）

蛭田本は味の字は口編である。そして考は弓になっていない。

筆者は異なると考えられる。

(2) 蛭田本と幽学記念館所蔵の奉行所本の標題（写真4、5）

タイトルの微味幽玄考をみると、蛭田本は非常に丁寧で、奉行所本はすらっと書いているという違いはある。しかし、味の文字はどちらも口である。考の文字は、弓になっていない。なお、幽学自身の書き方の特徴であると考えられる味の字の「未」の部分の先端が右から筆が入っている。

(3) 内容

次に蛭田本と奉行所本の「微味幽玄考」の内容の文字からいくつかあげてみると次のことがいえる。（写真6）

- ・「乃」の文字を、流れて書いている。
- ・「夫」の文字がつきでている。
- ・人の文字が、右側の文字が長くなっている。
- ・之の文字が之になっている。
- ・者の文字が縦長である。
- ・巻の1の1頁だけあげてみると、非常に似ていることが理解される。
- ・筆法の角度は、一定している。

なお、大正大学教授で書道家でもある赤平和順教授からつぎのようなコメントをいただいている。

「字のくずし等も正確で手慣れた運筆で、書法もしっかりとしている。縦長に字形をまとめ流麗に
四 みなく書かれている。」

また、同様に帆風美術館主任研究員 白井惣右衛門氏からもつぎのような解釈をいただいた。

「いくつかの筆法があるが、幽学自身の特徴のある書き方である。自筆に間違いはないと考える。長い間、江戸時代の掛け軸を扱っているが、このような書き方は門人には無理であろう。」

正本であると考えれば、信頼のおける門人にあずけたと推定されるし、また出版する予定であった

と考えると、内容的に朱で枠をつけた細註のつけかたは、ほとんど全集、選集と同じである。そして紙縫りで綴じているものに表紙をつけているのは大事に扱ったことの証拠である。また、表紙は、古書店、専門家によると文化・文政期頃のものによく使われているという。

このように、蛭田本が正本であるかどうかの検討をしたのであるが、それに近いことはいえるのではなからうか？

4. 微味幽玄考をめぐる今後の研究課題

以上述べてきたが、微味幽玄考をめぐる、次のような課題がでてくるであろう。

まず、微味幽玄考の成立がどのような時代に、どのようなきっかけで執筆されたか、具体的プロセスが重要である。そして、下書きが多く存在することから、その下書きの詳細な検討も重要である。また、門弟が書写したとされる文書が多いことからそれらの特徴や誰が書写したかの検討が必要である。さらに、幽学の思想形成を見るために、全国を遊歴し、遠藤家に寄寓したあとの旅の仕方や人間関係についてさらに詳しく考察することが求められる。

註

- 1) 下程勇吉・久木幸男校註「二宮尊徳・大原幽学集」297頁 玉川大学出版 昭和41年
- 2) 大原幽学全集 「神文及道友録」909頁 千葉教育会 昭和18年再版
- 3) 同 522頁
- 4) 同 611頁
- 5) 同 521頁、
- 6) 486頁
- 7) 同 539頁
- 8) 同 464頁、467頁、472頁、476頁
- 9) 同 571頁
- 10) 同 624頁
- 11) 下程勇吉・久木幸男校註「二宮尊徳・大原幽学集」297頁 玉川大学出版部 昭和41年
- 12) 鈴木映里子「大原幽学の基礎的考察」国立歴史民俗博物館研究報告 第115集所収 24頁 平成16年2月
- 13) 田尻稲次郎「幽学全書」548頁、549頁 明治44年再版 同文館
- 14) 大原幽学全集 書簡集 743頁 千葉教育会 昭和18年
- 15) 同 736頁、737頁

※大原幽学記念館学芸員 猪野映里子氏（旧姓鈴木）に「奉行所本」や関係資料についてご懇切な閲覧をさせていただきました。誌上をかりて衷心より感謝申し上げます。

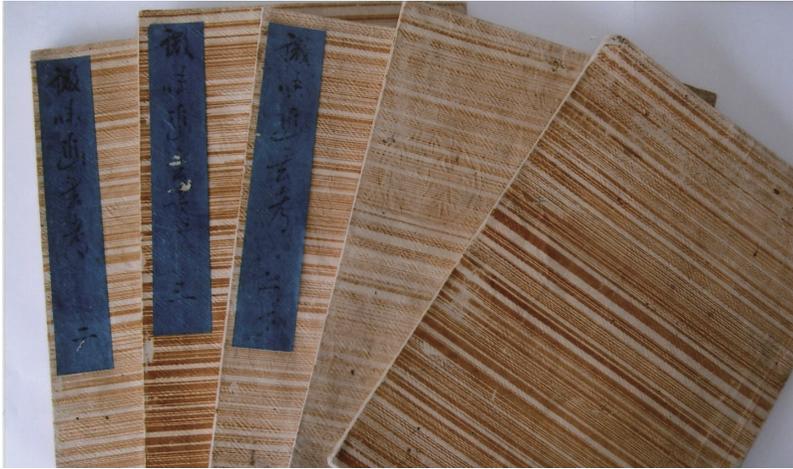


写真1 (蛭田本)



写真2 (幽学記念館所蔵)



写真3 (蛭田本)

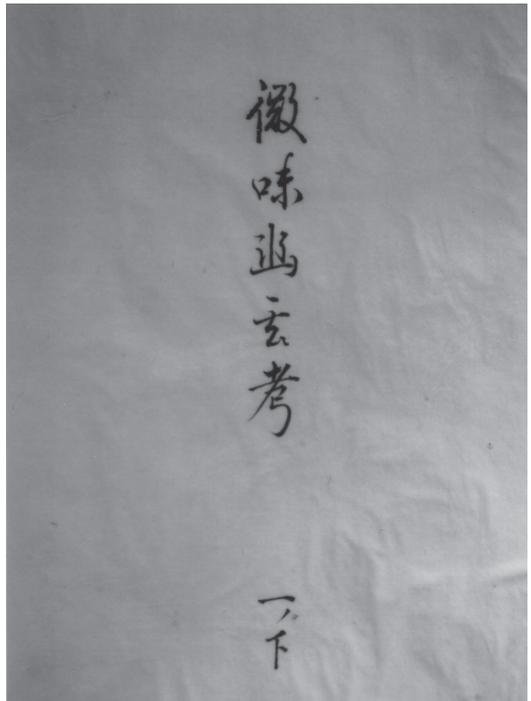
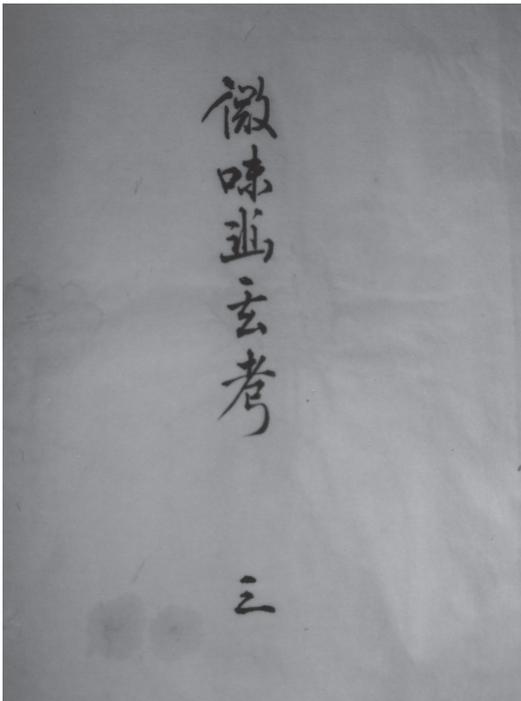
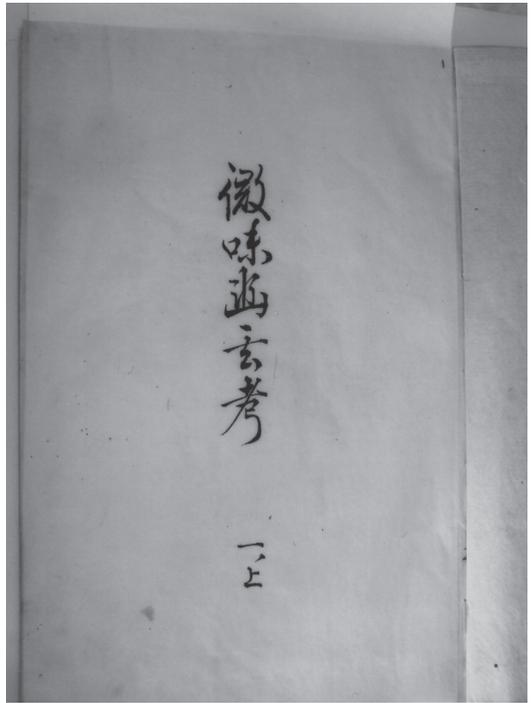
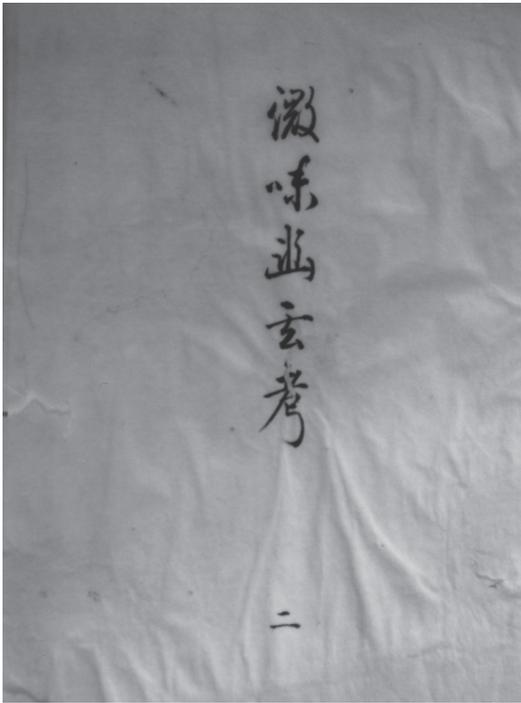


写真4 (蛭田本)

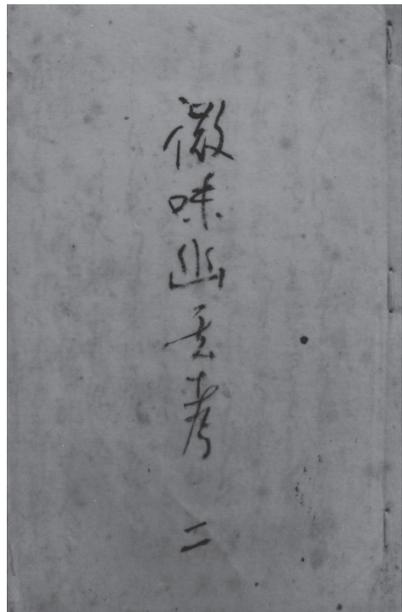
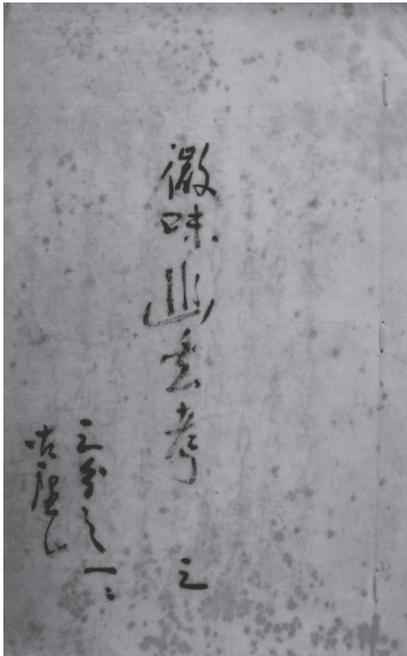
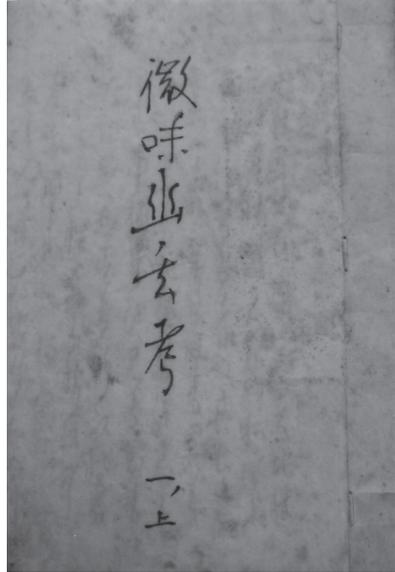
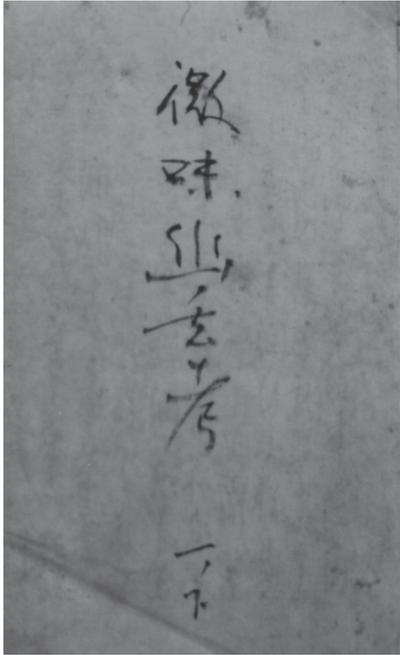


写真5 (幽学記念館所蔵)

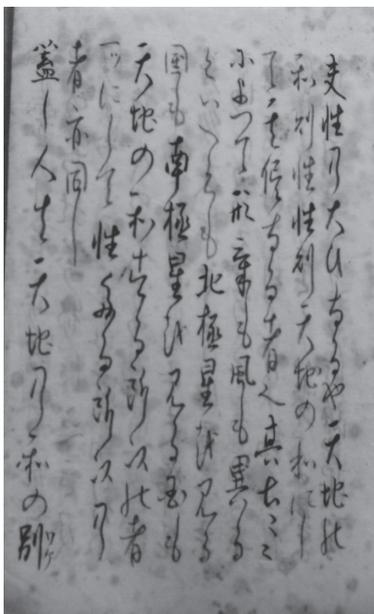


写真6 (幽学記念館所蔵〈奉行所本〉)

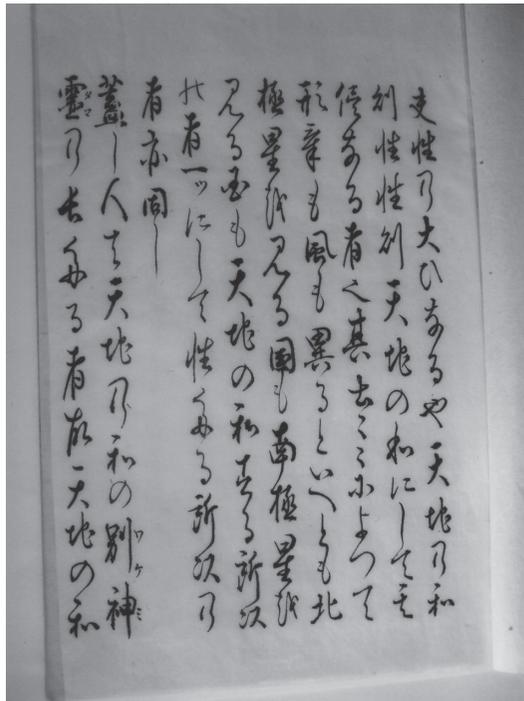


写真6 (蛭田本)